

視覚障害学生への支援意識に関する一考察 —大学図書館の利用を中心として—

関 瑞穂

本研究の目的は、視覚障害者に対する文献利用に関する支援は誰によってどのようになされているのかを明らかにし、さらにそのさまざまな提供者らや受け手が、サービスのアクセシビリティやその行使についてどのような価値観を持っているのかを明らかにすることである。筑波大学は歴史的に視覚障害学生を含めた障害学生を受け入れてきており、筑波大学附属図書館のサービスは他大学の図書館に比して一歩先んじていると筑波大学内外から認識されている。大学という限られたフィールドのなか、筑波大学附属図書館を中心とし、視覚障害サービスを調査する。

本研究ではエスノグラフィー（参与観察及びインタビュー調査）の手法を用いる。アンケート調査等の定量的な研究だけでは明らかにすることが出来ない一人一人の意識を調査するためにはこの手法が適していると判断した。視覚障害学生、大学図書館、学生支援団体(ピア・チューター)、これら三種類の立場という多方向からの視点でもって、支援の意識がどのようなものであるか、それぞれの関係性も含めて解きほぐす研究は未だなく、この研究はその意味でも価値を持つと自負している。

本研究の調査から、視覚障害学生、大学図書館、学生支援団体(ピア・チューター)の三者が、視覚障害サービスについてどう考えているか、また、互いの組織をどう認識しているかが明らかとなった。大学図書館と学生支援団体(ピア・チューター)は互いをはっきりとは意識しておらず、自分たちのサービスを取捨選択するのは利用者である視覚障害学生であると認識している。この認識は、利用学生の積極的な意思があつて初めて利用される大学図書館の側がやや強いようであった。また、利用者である視覚障害学生は、自分の障害とどう付き合ってきたかということが、支援の利用しやすさ・しづらさに影響があるのではないか、と結論づけることができた。

これらの研究結果から、筑波大学に所属する視覚障害学生への支援意識の実情の一端が明らかとなった。今年 20 周年を迎える図書館ボランティア「図・ボラの会」、学生主体であるがきちんと系統立てた養成がなされる学生支援団体「ピア・チューター」、これら二つの支援者の意識は、ボランティアというものに対する意識を考える上でひとつの事例報告としても有用なものである。

(指導教員 照山絢子)